

氏名	矢野忠正 のただまさ
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第134号
学位授与の日付	昭和39年6月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	Verbreitung der lymphatischen Apparate im Tracheo-bronchialbaum der Affen (猿の気管気管支樹に於けるリンパ装置の分布)
論文調査委員	(主査) 教授 堀井五十雄 教授 西村秀雄 教授 岡本道雄

論文内容の要旨

気道壁のリンパ装置について、比較解剖学的知見を確立するため、3種の猿、すなわち、「まん」と「ひび」、「くもざる」、「台湾ざる」を対象となし、気管、気管支、これにつづく両肺の横断連続切片標本を通じ、上皮下リンパ組織の構造と分布を、該気道の全域にわたって追及精査、次の結果を得た。

1) 猿の気管気管支樹では、終末部、すなわち、肺胞管ならびに肺胞を除くと、気道の全体を通じ、リンパ装置の分布をみると、これらは、主としてリンパ浸潤、一部孤立小節の形で現われるが、後者にはしばしば、二次小節ないし明中心の分化発達を伴う。

2) 猿の気管気管支樹を通じ、リンパ装置の形成は、この首側域、すなわち、気管、主および葉気管支、気管支枝では、気道壁の内層すなわち粘膜に限局して起こるが、細気管支や呼吸細気管支のような、末梢域になると、気道壁を構成する軟骨線維層の消退とともに、該壁外層へ移動転位する。

3) 猿の気道リンパ装置は、一般に、気管気管支樹の末梢部、すなわち気管支枝、細気管支、および呼吸細気管支の領域で、量質ともに、集中的な発達を遂げ、とりわけ、この傾向は、大気管支枝においてもっとも顕著にみとめられ、ここを頂点として、首側部に向う発育度の衰勢を示す。

4) 猿の気管気管支樹の全体を通じ、気道分岐部に位置するリンパ装置と非分岐部のそれとは、約64:36%の発現頻度を示し、前者に好発の傾向をみるが、これは、家兎の気管支樹における先人の所見と基本的に一致する。

5) 猿の気道リンパ装置に関する知見を、比較解剖学的立場から、従来の文献に照合すると、成人の肺外気道においては、上皮下リンパ装置は、量質ともに、葉気管支域、すなわち肺門部に相当して、最高の発育度を示し、ここから求心的に低減、また家兎の肺内気道については、細気管支や呼吸細気管支のような、気管支樹の末梢部で、最高の分布発達をみると、ここから首側域に向って減少している。したがって気管気管支樹を通じ、リンパ装置の発育機構の優位は動物が高等になるにつれて、漸次肺門部に向って、収斂移動の傾向を示し、人類におよんで、葉気管支域、すなわち肺門部の気道壁に、圧倒的に集中、ここ

に人体気管気管支樹の上皮下リンパ中枢を形成するものと推論しうる。

論文審査の結果の要旨

著者は比較解剖学的見地から、「まんとはひひ」、「くもざる」、「台湾ざる」の気管、気管支および肺内気管枝の終末分岐にいたるまで、その粘膜上皮下リンパ組織の分布をしらべつぎのような結論を得た。

1) さるの気管気管支樹では肺胞管ならびに肺胞をのぞく終末部まで気道全域をつうじて、リンパ組織の分布を認める。リンパ組織の種類としてはリンパ浸潤が主体であるが、ときどき明中心をもった二次小節の出現をみることもある。

2) さる気道リンパ組織全体をつうじて分岐部に位置するものと、しからざるものの比率は64%：36%で、家兎についての先人の所見にはほぼ一致する。

3) 比較解剖学的見地から、じゅうらいの人、家兎の気道壁粘膜リンパ組織の分布に関する研究をみると、動物の進化にともなって、リンパ組織は気道の中枢部にむかって増強の傾向がはっきり現われている。さるではこの中間型ともみられる態度を示し、リンパ組織は各気管支枝の全領域に比較的万遍なく分布しているが、Ramus bronchiolis を例にとると明らかに中枢部にむかってリンパ組織の数は求心的に著増している点は人の所見にちかいが、細気管枝、呼吸性細気管枝においても多数のリンパ組織の出現をみる点では家兎の所見にちかい。

このように本研究は学術的に有益であり医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。